

令和4年度 帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援事業
(Ⅱ 外国人の子供の就学促進事業)
事業内容報告書の概要

都道府県・市区町村・協議会名【 岐阜県可児市 】

令和4度実施した取組の内容及び成果と課題

1. 事業の実施体制

市とNPO団体が連携して、就学年齢前から就学年齢を超えた外国籍の子どもで就学等を希望するものを対象とした各種教室を実施する。

外国籍児童生徒	教室(学校外)	コーディネート	受入先
就学年齢前の子ども	就学前準備指導教室「ひよこ教室」 NPO 法人可児市国際交流協会	NPO 法人可児市国際交流協会 教室コーディネーター	小学校 中学校
初めて日本の公立小 中学校へ就学希望する子ども	初期適応指導教室 「第1ばら教室 KANI」「第2ばら教室 KANI」 市教育委員会	ばら教室コーディネーター 指導主事	国際教室 ↓ 在籍学級
不就学等の子ども	不就学等の子どもの就学指導教室 「ゆめ教室」「ゆめスマイル」 NPO 法人可児市国際交流協会	NPO 法人可児市国際交流協会 就学コーディネーター	
就学年齢の子ども (小中学校在籍)	日本語、教科基礎学習教室 「きぼう教室」 NPO 法人可児市国際交流協会	NPO 法人可児市国際交流協会	
就学年齢を超えた子ども	就学年齢を超えた子どもの高校進学 支援教室「さつき教室」 NPO 法人可児市国際交流協会	NPO 法人可児市国際交流協会 進学コーディネーター	高校 地域活動 合宿

■連携団体(事業委託団体)

団体名称： 特定非営利活動法人可児市国際交流協会

代表者名： 理事長 渡邊 孝夫

所在地： 〒509-0203 岐阜県下恵土 1185 番地7(可児市多文化共生センター内)

連絡先： 0574-60-1200

団体概要： 市民主導により 2000 年に「可児市国際交流協会」設立。設立当初は日本語学習や異文化交流などが中心であったが、2003 年の外国籍の子どもの教育調査によって不就学の子どもが存在が明らかとなり、以後、外国籍の子どもの就学支援等に力を入れている。2008 年に NPO 法人となり、同年から可児市多文化共生センター指定管理者として管理、運営を行っている。また、今回申請する各教室については、これまで国際交流協会が実施してきた事業を継続して行うものである。

団体組織： 役員会(監査2人、理事8人で構成)

会員数 556 人(正会員 225 人、賛助会員 331 人)

事務局スタッフ 13 人

2. 具体の取組内容 ※取り組んだ実施事項①～⑥について、それぞれ記入すること

①不就学等の外国人の子どもに係る学校等との連携調整

- ・各教室にコーディネーターを配置し、市教委や各学校、ばら教室と連携調整をした。
- ・必要に応じて、不登校児童生徒のケース会議の開催、及び出席をした。
- ・学校と情報共有することで、学校外の視点で、対象児童生徒の生活環境等の理解を学校側に知らせることや児童生徒へのアプローチ方法、指導内容について、検討及び協議ができ、学校へ円滑につなげるための準備を整えることができた。

②学校外における、不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導のための教室の開設

ア) 初期適応指導教室「第1ばら教室KANI」「第2ばら教室KANI」(市教育委員会)

校外の市営施設で、室長1名、コーディネーター兼学習指導員2名、学習指導員8名、常勤講師1名を配置し、初めて日本の公立小・中学校へ編入学した児童生徒を対象に、学校生活に必要な適応指導を集中的に実施した。

和2年8月に「第2ばら教室KANI」を開設にともなってコーディネーター及び学習指導員を増員し、継続的に研修を重ねて指導者としての資質向上を図った。

基礎的な日本語指導だけではなく、学校のきまりやルール、マナーなど規範意識を育む生活指導、当番活動や清掃活動など日本の学校生活に関する指導、日本の文化や習慣に関する指導、食生活への適応指導、キャリア支援等、日常の中で包括した実践を行っている。

イ) 未就園児の小学校入学前準備指導「ひよこ教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

委託先: NPO 法人可児市国際交流協会

場所: L ポート可児(可児市姫ヶ丘 1-37) 10月～3月

指導者数: 7人 参加人数: 28人

通常授業: 月～金 9:30～15:30

日本の幼稚園・保育園に近いスタイルで運営し、小学校入学前までに「できるといいね」とされていることが1つでも多くできるように、1人ひとりの発達の状況に応じて肯定的な対応とスモールステップを大切にする指導を行った。また、牛乳指導や、防災ワークショップ、授業参観、様々なワークショップなどを行った。

ウ) 不就学・不登校・自宅待機の子どもの就学支援教室「ゆめ教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

委託先: NPO 法人可児市国際交流協会

場所: 可児市多文化共生センター フレビア(可児市下恵土 1185-7) 及び可児市総合会館(可児市広見 1-5)

指導人数: 7人 参加人数: 3人

授業時間: 10:00～12:00

指導内容:

- 1) 日本語初期指導の学び直し とともに、教科学習、キャリア教育を行った。
 - ・日本語については、漢字・語彙、社会性に関連した語彙を学習
 - ・算数については、入室時に実力テストを行い、習得レベルに応じた学習習得レベルに相応し、社会性に関連した事柄を取り扱った計算練習
- 2) 不登校・不就学の児童生徒への支援
 - ・市内中学校とのケース会議及び、定期的な連絡連携会議への参加
 - ・いつでも受け入れ可能な教室体制「ゆめスマイル」
 - ・家庭訪問(対象者がいなかったため、今年度実施なし)
- 3) 市内小中学校での日本語支援(対象者がいなかったため、今年度実施なし)
 - ・支援者が学校で、入り込み又は取り出しで、日本語学習を行う
 - ・フレビアに取り出しで、日本語学習を行う

エ)就学年齢を超えた子供の進学等に向けた支援教室「さつき教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

委託先: NPO 法人可児市国際交流協会

場所: 可児市総合会館(可児市広見 1-5)

可児市多文化共生センター フレビア(可児市下恵土 1185-7)

指導者: 統括コーディネーター1人、教室コーディネーター(指導者も兼ねる)1人、日本語指導・教科指導者 13人

時間: 毎週月曜日・火曜日・木曜日・金曜日 10:00~16:00

勤務形態: 雇用1人 10:00~16:00 週4日(月曜日・火曜日・木曜日・金曜日)

日本語及び教科指導は、時間割の各コマで指導

参加人数: 17人(2人は退室)

内容: 義務教育年齢を超えた子どもの高校進学を支援

- ・日本語初期指導 日本語教材を活用し、文法積み上げの日本語の基礎を指導、作文、面接練習
- ・教科指導 進路に合わせ、国語、数学、英語をしっかりと指導し、5教科受験対象者には、受験対策として理科、社会を指導
- ・進路ガイダンス 進路説明会を実施(5/27)県教育委員会の進学ガイダンスに参加(9/26, 9/27, 9/30)
- ・学校見学
東濃高校、加茂農林高校、加茂高校定時制、八百津高校、犬山高校定時制、岐阜各務野高校、東濃フロンティア高校
- ・保護者面談 入室時と個別面談などで2回以上

オ)日本語及び教科補習教室「きぼう教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

委託先: NPO 法人可児市国際交流協会

場所: 可児市多文化共生センター フレビア(可児市下恵土 1185-7) 及び

可児市総合会館(可児市広見 1-5)

指導者数: 19人(小学生クラス)、10人(中学生クラス)

参加人数: 29人(小学生クラス)、24人(中学生クラス)

授業時間: 土曜日 10:00~12:30、13:00~15:00(小学生)、15:30~18:30(中学生)、夏期講習 2022年8月1、2、4、5日
9:30~12:30(小学生クラス)

指導内容: 公立の小中学校に通う児童生徒への日本語、教科補習を行う。

<小学生クラス>

- ・低学年と中高学年を分けて実施。算数と国語(どちらも日本語指導含む)を中心に指導。
- ・群読などグループでの学習にも力を入れる午前クラスと個別に近いかたちで集中補習を行う午後クラスを設け、子どもたちのニーズに合わせて支援を行う。

<中学生クラス>

- ・指導教科を国語・数学・英語に絞り、子どもたちの学習のレベルに合わせて個別に計画を立てて支援を行う。必要に応じて、下学年や小学校の単元にもどって学び直しも行う。

③不就学等の外国人の子どもに対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導を学校外において行う指導員の研修

- ・外国人の子どものリモート学習支援講座<入門編>を実施した。2022年9月25日~10月16日全4回
(岐阜県国際交流センター委託外国人の子どもの日本語支援者育成研修)
- ・母語支援者研修 2022年7月31日~2023年1月22日 全8回(自治総合センターコミュニティ助成)
母語支援者のためのブラッシュアップ研修

④不就学等の外国人の子どもに係る地域社会との交流の促進

⑤ 其他不就学の外国人の子どもの就学の促進に資する地域独自の取組

- ・はら教室 KANI のコーディネーターを中心に不就学児調査を行い、実態把握と不就学者には就学指導を行った。

3. 成果と課題 ※取り組んだ実施事項①～⑥について、それぞれ記入すること

①不就学等の外国人の子どもに係る学校等との連携調整

【成果】

・学校と情報共有することで、学校外の視点で、対象児童生徒の生活環境等の理解を学校側に知らせることや児童生徒へのアプローチ方法、指導内容について、検討及び協議ができ、学校へ円滑につなげるための準備を整えることができた。

【課題】

・ケース会議では、対象の生徒の学校での様子、担任の性格や不登校に対する考え、学校の支援体制はどのようになっているのか、実際に顔を突き合わせることで、表情を見ながら子どもに対する思いや不満を確認することができる反面、当該教室への期待度も高くなり、当該教室への在籍が当たり前になる雰囲気も生じている。

②学校外における、不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導のための教室の開設

ア) 初期適応指導教室「第1ばら教室KANI」「第2ばら教室KANI」(市教育委員会)

【成果】

- ・令和4年度 ばら教室KANIの修了者:72名
- ・ばら教室KANIでの初期日本語指導の実施と国際教室等との連携により、学校生活への適応に戸惑いが少なくなり、不適応による不登校や退学を未然に防いでいる。
- ・帰国以外の事由によって生徒が在籍校を中途退学するケースはなくなってきた。
- ・高校進学を前提に、日本社会で生きていくために日本の学校で学ばせたいという保護者の意向が強まっていることから、ばら教室KANIの重要性が増してきている。
- ・多くの不安や悩みを抱える保護者との連携を密にして、積極的な教育相談に努めたり、在籍校での見学や体験の回数を増やしてばら教室KANI修了後の不安を軽減したりした。また、在籍校にとっても、通学開始前にかかわりをもつことによって児童生徒理解を進める機会となり、対応方針について検討することができた。
- ・学校内に第2ばら教室KANIを開設したことによって、第1ばら教室KANIでは実施することができなかった体育館や音楽室等での活動を通して、在籍校での生活への意欲の高まりがみられた。第2ばら教室KANIを開設することによって、カリキュラムや一層きめ細かな指導についての検討・実践を行うことができた。
- ・ばら教室で作成した日本語指導のための教材を市内全小中学校で共有し、各校で活用した。特に指導経験の浅い教員にとっては、すぐに使える教材として好評であった。

【課題】

- ・ばら教室KANIから学校への接続を円滑にする体制づくりを進めることができたが、学習面における急激な難易度の高まりに戸惑う児童生徒は少なくない。ばら教室KANIと学校の双方が初期的な日本語の習得と学力の向上という統合的な学びについて検討し、カリキュラム及び学習活動を見直す必要がある。
- ・日本語指導が必要且つ発達に課題を抱えている疑いのある児童生徒への支援体制の改善を図り、ばら教室KANIのコーディネーターと在籍校の特別支援コーディネーター等との連携によるアセスメントや個別ケース会議、必要に応じて通訳を交えた発達検査(WISC-IV)を実施した。外国籍児童生徒教育においても「個別最適な学び」を具現するため、特別支援教育の専門的な見地からの助言を踏まえた方策を検討していく。
- ・母語教育の重要性が指摘されている。ばら教室では一部の授業で母語も活用した取り組みを実施したが、在籍校での実施は難しい。フレビア等の関係機関との連携も踏まえ、検討していきたい。

イ) 未就園児の小学校入学前準備指導「ひよこ教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

【成果】

- ・集団生活ができるようになり、子ども同士も日本語での会話が増えた。
- ・日本語指導に慣れ、日本語で指示を聞いて活動することができるようになった。
- ・教室のルールやルーティンがわかり、自分でできることが増えた。
- ・指導者の声かけにより、時間の区切りを意識しながら活動することができるようになった。
- ・自由活動の時間等に友だちとの関わりが増え、日本語でコミュニケーションをとりながら上手に交わるようになった。
- ・自信をもって日本語でコミュニケーションをとったり、発表したりできる子どもが増えた。
- ・特別な配慮が必要な子どもについて、指導者の加配などによりサポートを強化することで、信頼関係を築き、感情をコント

ロールすること、言葉でコミュニケーションをとることが少しずつできるようになった。

- ・保護者、教育委員会、子育て支援課、入学先の小学校、それぞれとの連携を密にし、就学までの間の重要な手続きや調整、就学後の支援体制を整えるための準備を行うことができた。
- ・教育委員会と教室コーディネーターが連携し、未就園児や来日間もない年長児を積極的に受け入れ、1日でも多く日本語指導を受け、就学に向けた気持ちの準備ができるよう、支援することができた。教室につなげるのが難しいケースでは、外国人児童生徒コーディネーターと連携し、できる支援を行った。
- ・関係機関との連携が強化されたことで、子育て支援課の園巡回指導に加えてもらったり、園の指導者向けの研修等に招待していただいたりなど、受けられるサポートも増えた。
- ・外国人向けの認可外保育所との連携が拡大され、より多くの保育所の子どもたちが定期的に教室に通い、日本語指導を受けられるよう支援することができた。

【課題】

- ・教育委員会と教室コーディネーターが連携することで、未就園児の洗い出し、家庭へのアプローチは確実に行うことができていたが、両親が共働きのため、教室の時間前後に子どもの面倒を見られる人がいない、教室までの交通手段がなく送迎ができないなど、様々な事情で「ひよこ教室」につなげるのが難しいケースも継続してあった。
- ・各家庭や子どもの事情に寄り添いながら、また、関係機関と連携しながらできる支援を継続した。
- ・特別な配慮が必要な子どものケースでは、こども応援センターばあむや教育研究所と連携しながら保護者支援、また、指導者を加配しながら子どもの支援にあたった。
- ・各機関からのフィードバックを指導者とも共有し、今後の指導に役立ててもらうようにしたが、現在の運営体制で受け入れられるケースには限界がある。
- ・保護者に現状を理解してもらうこと、指導者にとって過度な負担とならないよう配慮すること、関係機関との必要な調整など、困難さを伴う業務も多かった。
- ・引き続き、教室のみでケースを抱えずに関係機関と連携しながら支援を行っていく体制が重要であると考える。

ウ)不就学・不登校・自宅待機の子どもの就学支援教室「ゆめ教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

【成果】

- ・日本語が不十分で授業についていけない子どもは、学校に行くこと自体が苦痛に感じ、家から出られない状況であるため、在住外国人が多く利用するフレビアを会場にすることで、「学校」という枠にとらわれない安心感をもらすことや、対象児童生徒の習得度に進度を合わせたり、理解をしっかりと確認することができた。
- ・その子どもの個性を引き出す活動を行い、心に抱えている問題に向き合うことができた。

【課題】

- ・支援している二人は姉弟だが、親は、我が子が不登校傾向に陥っていることに疲弊し、学校への送り出しを諦め、仕事を優先せざるを得ない状況が生じ、ますます、子どもたちは学校から足が遠のいてしまっていた。そのような様子を学校には、「何もしない親」というように映ってしまい、親と学校間との軋轢が生じていた。
- ・ゆめ教室では、両者の意見が聞ける立場であるため、どこに誤解が生じているか確かめることができるが、実際は、そんなに難しい話ではないことが多い。そのように、家族にアプローチする方法や感情もケース会議を重ねるごとに、探っていく必要がある。
- ・高校進学を希望しない生徒だったが、授業内で話をしていくうちに、高校進学に関する情報が乏しいことが分かった。
- ・受験条件、進路先、自分の将来の夢と結びつけることは程遠く、今までの頑張りをどうにか引き出してあげようという大人の思いが伝わらないのが、よく分かった。
- ・来日直後に、夢や希望が抱けるような、どう頑張れば、自分の夢に近づけるのかという方法や日本でも自分の才能を発揮できる可能性を知るガイダンスが必要なのではないかと感じた。

エ)就学年齢を超えた子供の進学等に向けた支援教室「さつき教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

【成果】

- ・新型コロナウイルス感染症に対し、昨年度よりも柔軟に対応することが可能となったため、今年はより多くの活動を行うことができた。
- ・興味のある学校の先輩と繋げたことで、生徒の進路の悩みを解決することができた。
- ・オンライン授業を完全になくすのではなく、活動場所が確保できなかったりした時や、本人が健康体でも濃厚接触により自粛を言い渡された時など、オンラインでつないだりすることで授業を継続することができた。

- ・生徒との面談回数を増やしたり、振り返り会を定期的実施したりすることで、生徒により寄り添った教室活動を実現できたとともに、母語が異なる生徒間同士の横のつながりも形成することができた。
- ・社会人とのワークショップや、大学生との交流授業を実施したことにより、日本語で話すことへの意欲が高まり、明らかな学習能力の向上が見られた。

【課題】

- ・生活習慣、生活のリズムが直せない、精神的に不安定である等から、遅刻や欠席が目立つ。
- ・指導者の教え方のスキルアップや研修の機会が必要
- ・日本の教育制度について説明を繰り返しても、理解ができない保護者が多いことから、単なる言葉による説明ではなく、別のアプローチを模索する必要があるが、多くの保護者は仕事のために進路に関する説明会や活動に参加できないケースが多い。
- ・入室時期にばらつきが多いため、既に教室で学んでいる生徒との日本語能力の差が大きく、既存の教室では受け入れられないケースが多かった。しかし、新しいクラスを開設するには、指導者の数と活動場所が足りない。
- ・日本語の習得速度が個々人で異なるために、同じクラスでの学習が難しい生徒が段々と増える。

オ) 日本語及び教科補習教室「きぼう教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

【成果】

＜小学生クラス＞

- ・低学年では、作文用教材を利用して日記を書く練習を継続したことで、5W1H のシンプルな構成を活用した文章がスムーズに出てくるようになった。計算で躓く児童の計算力が上がり、繰り上がり、繰り下がりができるようになった。
- ・高学年では、音読を継続して取り組むことで、句読点を意識しながら、はっきりとした発音で文章の読み上げができるようになった。
- ・助詞や文節などを意識させることによって自然な日本語で音読できるようになってきた。
- ・日本語を理解し語彙をふやした結果、全国規模の国語試験で平均点を上回る得点を得る児童がいた。

＜中学生クラス＞

- ・なかなか課題と向き合えない生徒がついに学習に励み、「〇〇の勉強がしたい」と自分で伝え、行動にすることができるようになった。
- ・「テストでいい点数取れたよ」「先生から教えてもらった内容、テストに出て答えられたよ」など生徒から報告があった。
- ・小テスト、単元テスト、実力テストを意識して、それに向けてどうしたらいいのか、どうしたら点数が上がるか生徒自ら考えるなど、学習習慣を身につけた生徒が多く見受けられる。
- ・教室に通い始めてから、学校の定期考査で良い点数を取れるようになったと、保護者から感謝の言葉をいただいた。

【課題】

＜小学生クラス＞

- ・生徒が欠席する際、保護者から事前連絡する家庭が多くなく、支援日に必要以上の数のサポーターが来てしまうこともしばしばあった。生徒や家族の体調不良はやむを得ないとして、学校行事で休むことは事前把握できるので、近隣小学校の年間行事を確認するとよい。
- ・入室希望者の中に特別な配慮を要するのではと考えられる子が目立ってきた。配慮が必要か否かを見極めるためには、これまで一回の体験と親子面談を経ての入室だったが、体験期間を設けてじっくり決めるべきかもしれない。

＜中学生クラス＞

- ・可能な限り個別指導を行いたい、生徒数に対してサポーターの数が少なく、きめ細やかな指導ができない。自己学習がなかなかできない生徒や受験生を優先するなど工夫をしつつ、サポーターを確保していく必要がある。

＜小・中学生共通＞

- ・子どもが抱える問題や課題に応じて、保護者の不安感にも寄り添いながら、子どもが通う学校とも情報を共有し、連携して支援を行っていく。

③ 不就学等の外国人の子どもに対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導を学校外において行う指導員の研修

【成果】

- ・参加者は、新しいことを覚えることは大変だったが、慣れていくことが大事だと思ったり、リモート学習に対して、向上心があることが伺えた。コロナ禍に限らず、リモート学習を余儀なくされた場合に、学びを止めない支援につなげられる大事な講座となった。

・学校通訳サポーターを主な受講者に想定していたが、実際は参加があまりなかった。もう少しニーズを調査し研修内容を検討したい。

【課題】

- ・リモート学習を行いたくても、インターネットやデバイスの準備等の環境整備が必要である。
- ・コロナ禍をきっかけに、リモート学習の利便性、重要性を見出した反面、環境整備に委託費用が充当されないのは、痛手であった。
- ・学校通訳のスキルアップを目的としたが、参加状況はよくなかった。時期や時間帯の検討もあるが、研修内奥の検討が必要。

④不就学等の外国人の子どもに係る地域社会との交流の促進

【成果】

<ひよこ教室>

・教室外の地域社会で、初めて出会う大人や子どもと交流することで、社会の中での生きた日本語を学ぶことができた。また、多様な経験を積むことで社会性を育てることもでき、子どもたちの成長も見られる貴重な機会となった。

<さつき教室>

- ・多くの高校を見学することで、学校の様子や学習内容に関する知識を付け、具体的な進路をイメージすることができた。
- ・年齢が近い大学生や中学生との交流を経て、日本語でのコミュニケーションや進学に対する意欲を高めることができた。
- ・ボランティアへの参加を通して、活躍の場を得ることによって自己肯定感への高まりや積極性を得て、より活動への参加意欲を高めることができた。
- ・にじいろ☆キャンプを通して、先輩たちとの集団生活の体験や自分の将来への不安を他者と共有できたことで、将来に対して前向きになることができた。
- ・ワークショップを通じて、多様性と自分のアイデンティティへの理解を深めることができた。
- ・小学校の6年生の総合の学習でブラジルとフィリピンの紹介をした。母語で紹介するという取り組みで、小学生たちが一所懸命わかる単語を聴き取ったり写真を見ながら質問してくれた。
- ・いろいろな質問が出て一所懸命答えるさつき教室の生徒たちにも学びがあり、興味をしめしてくれるところがたくさんあり、「とても楽しかった。とてもいい機会になった。また行きたい」と感想を述べた。

<きぼう教室>

・教室内では、普段児童生徒や指導者にとってほとんど関わりがない若い世代のボランティアとの接点を持つことができ、地域に暮らす多様な人とのコミュニケーションを図る機会となった。

【課題】

<ひよこ教室>

- ・地域社会との交流は子どもたちの成長にとって非常に重要であり、普段とは異なる様子を知ることができる機会でもある。
- ・普段の教室活動から課外活動につなげることで、子ども自身の理解や学びをより深めることができるため、半年間の教室のプログラムとしてどのように構成していくのがよいか、今年度の経験をもとに再検討し、より活動を充実させていきたい。

<さつき教室>

- ・特定のグループでの活動が目立ち、教室全体での集団行動については未だ課題が多い。
- ・公共の場でのマナーに対する理解も十分でないことが多く、注意をして改善する生徒がいる一方で、なかなかルールを守らない生徒もいた。
- ・特に教室に長く在籍している生徒ほど教室ルールを疎かにし始める傾向があり、後から入ってくる生徒への悪影響となっている。このため、教室ルールの徹底について定期的なアプローチをしていきたい。

<きぼう教室>

- ・できた活動は、単日ボランティアの受け入れに限られてしまい、広く地域社会と関わる機会を持つことができなかった。
- ・週一回の限られた時間の中で、他にも交流の機会創出をする工夫が必要である。
- ・一度関わっていただいたボランティアに、1回限りではなく、他の教室や行事も含め、継続的で関わってもらうための施策の検討もしていきたい。

⑤ 其他不就学の外国人の子どもの就学の促進に資する地域独自の取組

【成果】

・市教委(ばら教室 KANI コーディネーター含む)からの情報共有、必要に応じて、学校の管理職とケース会議を開き、連携しながら、ゆめ教室への入室と導き、面談、支援とつなげ、ひきこもりや非行を防ぐことができた。

【課題】

・家族の経済的な理由や将来に対する不安などがあることもある。福祉的な視点でも連携が必要ではないか。また、ビザの関係で就学相談にすぐいかないケースもあった。行政窓口との連携も再確認の必要があるのではないか。

	3～6歳	7～12歳	13～15 歳	16～18 歳以上 (過年齢)
本事業で対応した子供の数	ひよこ教室 28 人	きぼう教室 29 人	きぼう教室 24 人 ゆめ教室3人	さつき教室 17 人

4. その他(今後の取組等)**①不就学等の外国人の子どもに係る学校等との連携調整****②学校外における、不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導のための教室の開設**ア) 初期適応指導教室「第1ばら教室KANI」「第2ばら教室KANI」(市教育委員会)

・ばら教室KANIから学校への接続を円滑にする体制づくりを進めることができたが、学習面における急激な難易度の高まりに戸惑う児童生徒は少なくない。ばら教室KANIと学校の双方が初期的な日本語の習得と学力の向上という統合的な学びについて検討し、カリキュラム及び学習活動を見直す必要がある。

・外国籍児童生徒教育においても「個別最適な学び」を具現するため、特別支援教育の専門的な見地からの助言を踏まえた方策を検討していく。

・母語教育の重要性が指摘されている。ばら教室では一部の授業で母語も活用した取り組みを実施したが、在籍校での実施は難しい。フレビア等の関係機関との連携も踏まえ、検討していきたい。

イ) 未就園児の小学校入学前準備指導「ひよこ教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

・引き続き、教室のみでケースを抱えずに関係機関と連携しながら支援を行っていく体制が重要であるとする。

ウ) 不就学・不登校・自宅待機の子どもの就学支援教室「ゆめ教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

・ゆめ教室では、両者の意見が聞ける立場であるため、どこに誤解が生じているか確かめることができるが、実際は、そんなに難しい話ではないことが多い。そのように、家族にアプローチする方法や感情もケース会議を重ねるごとに、探っていく必要がある。

・来日直後に、夢や希望が抱けるような、どう頑張れば、自分の夢に近づけるのかという方法や日本でも自分の才能を発揮できる可能性を知るガイダンスが必要なのではないかと感じた。

エ) 就学年齢を超えた子供の進学等に向けた支援教室「さつき教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)

・指導者の教え方のスキルアップや研修の機会が必要

オ) 日本語及び教科補習教室「きぼう教室」(NPO 法人可児市国際交流協会委託)<小学生クラス>

・入室希望者の中に特別な配慮を要するのではと考えられる子が目立ってきた。配慮が必要か否かを見極めるためには、これまででは一回の体験と親子面談を経ての入室だったが、体験期間を設けてじっくり決めるべきかもしれない。

<中学生クラス>

・可能な限り個別指導を行いたい。が、生徒数に対してサポーターの数が少なく、きめ細やかな指導ができない。自己学習がなかなかできない生徒や受験生を優先するなど工夫をしつつ、サポーターを確保していく必要がある。

<小・中学生共通>

・子どもが抱える問題や課題に応じて、保護者の不安感にも寄り添いながら、子どもが通う学校とも情報を共有し、連携して支援を行っていく。

③不就学等の外国人の子どもに対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導を学校外において行う指導員の研修

・学校通訳のスキルアップを目的としたが、参加状況はよくなかった。時期や時間帯の検討もあるが、研修内奥の検討が必要。

④不就学等の外国人の子どもに係る地域社会との交流の促進

＜ひよこ教室＞

・普段の教室活動から課外活動につなげることで、子ども自身の理解や学びをより深めることができるため、半年間の教室のプログラムとしてどのように構成していくのがよいか、今年度の経験をもとに再検討し、より活動を充実させていきたい。

＜さつき教室＞

・特に教室に長く在籍している生徒ほど教室ルールを疎かにし始める傾向があり、後から入ってくる生徒への悪影響となっている。このため、教室ルールの徹底について定期的なアプローチをしていきたい。

＜きぼう教室＞

・週一回の限られた時間の中で、他にも交流の機会創出をする工夫が必要である。

・一度関わっていただいたボランティアに、1回限りではなく、他の教室や行事も含め、継続的で関わってもらうための施策の検討もしていきたい。

⑤ 其他不就学の外国人の子どもの就学の促進に資する地域独自の取組

・家族の経済的な理由や将来に対する不安などがあることもある。福祉的な視点でも連携が必要ではないか。

※ 枠は適宜広げること。（複数ページになっても差し支えない。） 成果物等があれば別途提出すること。

※ 事業内容報告書の概要は、担当者・連絡先欄を除き文部科学省ホームページで公開する。